

教宣 せぶん

変革の時代

「強いものが生き残るのではない。賢いものが生き残るのではない。環境に適応したもののだけが生き残れる」。ダーウィンの進化論の中の言葉だそうです。支店長の年初の挨拶がメールで配信され、変革の時代にあって自らを変えられない者は滅んでいくという文脈の中で引用されていた言葉です。この言葉をどうとるかは、いま自らが置かれている環境や自らが持っている意識によって変わってくるのですが、契約係社員としての「存亡」をかけてたたかっている私たちにも重要な意味を持つ言葉だと思いました。

私たちのことを、「会社が決断を下したにもかかわらず、いつまでも従来の居場所にしがみついていると変わろうとしない。ノスタルジーだ」「タイタニック号は衝突したにもかかわらず、その事実を受け止めていない」と指摘する人たちがいます。経営側の立場にたつ多くの方の考え方はこういったものなのでしょう。

しかし、私たちは決して「しがみついている」わけではありません。自らの生活や雇用を守るために、そして働くものの「明日」を切り拓くために、経営者の一方的な、理不尽な攻撃を跳ね返すべく、「前向き」に行動を起こしているのです。旧指導者の陳述書に、「社前で通行人にビラを配ったり、抗議行動したりすることが見苦しい」とう趣旨の言葉が書かれていましたが、自らの生活や雇用を守るために、世論に訴えたり、抗議行動を行うことは決して見苦しいことでも、古くさいことでもありません。真面目に、真剣に、懸命に、自分の人生と向き合っているのです。

そして、私たちは決して「事実を受け止めていない」わけでもありません。会社の言う「事実」が本当なのかどうなのか、法的に認められることなのかどうなのかを、慎重に吟味しているだけなのです。もし「事実」でなければ、もし法的に認められなければ、私たちが前提とする情報そのものが誤っていたこととなります。前提条件とした「事実」が誤っている中で、正常な思考や行動ができるはずがありません。

まさに私たちのこうした行動そのものが、目の前にあらわれる「環境」に対応する行動と呼べるのではないのでしょうか。与えられた情報を鵜呑みにし、定年まで社員として働きたかったにもかかわらず、何もアクションを起こさなかった行為の方が、私たちには「後ろ向き」に映ります。「自らを変えようとしなかった」ように映ります。私たちは、強いものでもなければ、賢いものでもありません。しかし、目の前の「環境」が人工的に作られたものなのか、必然的に発生したものなのかを嗅ぎ分ける感覚は備わっています。また、誤っていることに対して、「おかしい」と立ち向かっていける純粋さも持っています。そして、自らの人生をかけたたたかいは最後までたたか

い切る執念も持っています。

逆もまた真なりです。環境に適応したものだけが生き残れるとするならば、逆に言うなら、生き残ったものは環境に適応したものと言えるでしょう。私たちがこの企業の中で、契約係社員として生き残っていくことで、「私たちが環境に適応していける存在である」「私たちのたたかいが環境に適応した行動である」ことを証明しましょう。